

令和 1年 10月 16日

若手研究者海外挑戦プログラム報告書

独立行政法人日本学術振興会 理事長 殿

受付番号 201980015

氏 名 村田 展樹

(氏名は必ず自署すること)

若手研究者海外挑戦プログラムによる派遣を終了しましたので、下記のとおり報告いたします。
なお、下記記載の内容については相違ありません。

記

1. 派遣先：都市名 キエフ (国名 ウクライナ)
2. 研究課題名（和文）：革命、内戦期ウクライナの国制史的研究, 1917-1921
3. 派遣期間：平成 31年 4月 23日 ~ 令和 1年 9月 17日 (148日間)
4. 受入機関名・部局名：キエフ・モヒーラ・アカデミー国立大学 歴史学科
5. 派遣先で従事した研究内容と研究状況（1/2 ページ程度を目安に記入すること）

現地の受け入れ教員であるスカルスキー上級講師の指導のもと、主にキエフに所在する文書館および図書館で一次史料を収集した。具体的には、本研究が扱う時代の諸国家の中央政府省庁についての史料を所蔵するウクライナ政府・行政最高機関中央国立文書館(ЦДАВО)、キエフ州の地方行政機関やその他の公的・私的組織の史料を所蔵するキエフ州国立文書館(ДАКО)で未刊行史料を、ウクライナ国立ヴェルナツキー図書館では絶版などの理由で現物の入手が困難な刊行史料および二次文献を調査した。

文書館および図書館では、革命、内戦期ウクライナの国家体制にかかわる史料を網羅的に閲覧したが、とりわけ成果が上がったのが革命、内戦期ウクライナにおける非ウクライナ人の政治的地位についての分析である。1918年1月に独立したウクライナ人民共和国では、ウクライナ内の主要な民族的少数派、ロシア人、ポーランド人、ユダヤ人に属人自治が与えられたとともに、中央官庁としてロシア省、ポーランド省、ユダヤ省が設置された。ЦДАВОでは以上の三つの民族省の文書を、ДАКОではキエフで活動したユダヤ人とポーランド人の市民組織の文書を閲覧することができた。少数派への属人自治の分析は、革命、内戦期ウクライナにおける民族の国制的位置づけの変遷を論じるうえで不可欠な作業であり、派遣者の長期的な研究にも大きく寄与するであろう。また、ЦДАВОでは、当時のウクライナ諸国家の外務省の文書も閲覧し、戦後国際秩序におけるウクライナ民族国家の地位の確定作業をウクライナ内部の視点から跡付けることが可能となった。

ウクライナ国立ヴェルナツキー図書館では、史料集に加え、新聞史料を閲覧した。とりわけ、ウクライナ国外では入手困難なイディッシュ語の日刊紙、雑誌を撮影することができた。

6. 研究成果発表等の見通し及び今後の研究計画の方向性 (1/2 ページ程度を目安に記入すること)

上述した革命、内戦期ウクライナにおける非ウクライナ人の政治的地位の分析については、日本への帰国後、2019年9月29日に東京で開催されたロシア史研究会大会において、「ロシア革命・内戦期ウクライナにおける民族属人自治」というタイトルで口頭発表を行った。報告原稿は、発表後にコメンテーター、聴衆から受け取ったフィードバックをもとに加筆および修正を行ったうえで、専門誌『ロシア史研究』に論文として投稿する予定である。さらに、海外の先行研究の文脈に合わせて議論を整えたのち、欧語雑誌にも論文を投稿予定である。

さらに、派遣先で閲覧した外交文書は、1919年のパリ講和会議から1921年のリガ条約に至るまでの第一次世界大戦後の国際秩序の構築過程を現地の視点から跡付けるために用いられる。この観点では、キエフで収集した史料を、今後収集予定である講和会議の公式議事録や関係諸勢力（ロシア白軍、ソヴィエト・ロシア、ポーランド）の外交文書と組み合わせて分析する。こちらも、成果が出た段階で学会で報告を行い、のちに論文として投稿予定である。

本プログラムによる研究成果は、中東欧における国際秩序の変動と新たな国家規範の形成の過程の解明という、派遣者の長期的な研究目標の達成のために寄与するものとなる。

7. 本プログラムに採用されたことで得られたこと (1/2 ページ程度を目安に記入すること)

何よりもまず、派遣者の専門であるウクライナ史研究の世界的な中心地であるキエフにおいて、現地研究者の指導のもと、史料調査を行ったことは、非常に有益な経験だった。学術論文の素材となるような一次史料を比較的長期にわたって調査することができただけでなく、ウクライナにおける文書館、図書館の制度や利用方法、また歴史研究者のおかれた環境などについて実際に見聞することができたからである。受け入れ教員のスカルスキー氏や、その他の大学や科学アカデミーの研究者との会話を通じて、近年のウクライナにおける近現代史研究の動向についての情報も得ることができた。これらはすべて、本プログラムによって、キエフに約五か月滞在したからこそ得られた経験と成果である。

また、派遣先での研究環境から、日本の研究環境を客観視する視点も得られた。例えば、経済的に順調とは言い難いウクライナにおいて大学の資金は乏しく、為替レートの障壁もあり、北米や西欧の主要な学術雑誌や研究書を購入していない場合があった。その結果、日本の大学図書館で手に入るウクライナ史の英語論文が、キエフでは読めないという事態がしばしば生じた。二次文献の所蔵の観点では日本の大学が比較的恵まれた環境にあることを確認したとともに、その環境が今後も維持、強化されることを一研究者として強く望むに至った。

さらに、長期的な視点では、国際的に活躍する研究者となるためのトレーニングとしても、今回の派遣には大きな意義があった。派遣者のように、外国地域の歴史や文化を専門とする研究者は、研究の遂行のためにしばしば長期的、あるいは短期的に外国に滞在することを必要とする。そこでは、当然ながら、日本とは異なる環境で研究以外の生活を一定期間営まなくてはならない。今回の派遣では、そのような将来の国外滞在中で遭遇する可能性のある困難やストレスもある程度経験することができた。この経験は、今後国外で研究活動を行う際、集中して研究活動に従事するために大いに役立つに違いない。